## 子どもたちの明日 Children, Our Future

CARING FOR YOUNG REFUGEES 幼い難民を考える会



ロイカトン祭り (灯篭流し) の日に (タイ・タブリック村保育所) Loy Kratong Festival (Tapphrik Village, Thailand)

#### 1998年6月 No.46 目次

#### レポート

タイの村にやって来たエプロンシアター 佐々木 舞

#### エッセイ

カンボジアの幼い子どものために ブロム・ブントゥアン

#### 連載

響き合う心といのち 「多文化の国カナダに定住して」 ヴター・パオ

#### インタビュー

地域国際交流ポランティアサークル デメキンクラブ 松本大さんに聞く

#### 暴新情報

「花まつりコンサート」が開かれました

#### 2 Report

Apron Theater Goes To Thai Village Mai SASAKI

#### 6 Essay

Working For Small Children In Cambodia PRUM Bunthoeun

#### 8 Series

Reverberating Heart and Life

"Having Resettled in Canada, the Country of Multi-culture" Vutha BAO

#### 10 Interview

Demekin Club, A Volunteer Group for Global Exchange

Interview with Hiroshi MATSUMOTO

#### 12 Latest Developments

"Hanamatsuri Concert"

# タイの村にやって来たエプロンシアタ



七年度の事業の一つをご紹介します。 移動図書車のタイへの寄贈などを行なってきました。今回は、九 の北区の保育園などでの研修(九六年度はプット、九七年度はブ 行なっています。九六年四月からこれまでに、CYRタイ人職員 リスナー)、中古絵本に翻訳を付けたものや、北区で使われていた からは総務部国際担当)と区民ボランティア、CYRが協力して |東南アジア保育支援事業]は、東京都北区国際文化課 (今年四月

「どっこいしょ」の声に合わせて (パライ村保育所) Concurrently with cheering (Parai Child Care Center)

のフェルト人形、 現する教材があります。写真のように、エ 園では、子どもたちが大好きな定番の教 記憶はありませんが、日本の幼稚園、保育 なっています。私が子どもの頃には見た ら取り出すと大きく広がるかぶと、六つ プロンシアターといいます。ポケットか プロンを掛け、それを舞台にするので、エ エプロンと人形を使ってこの物語を表 エプロンがセットに

在图

演じられていました。「アー・ウッ、アー・ 事業実施部門) た時、ちょうど、このエプロンシアターが テート郡のムアンパイ村保育所を訪問し 今年の一月、私がDEC (CYRのタイ の支援するアランヤプラ

くことができたというお話です。世界中 に呼んで、みんなで引っ張ってやっと抜 なかぶができましたが、抜くことができ で親しまれているロシアの民話です。 ょうか。おじいさんの畑に大きな大き 「おおきなかぶ」という民話をご存じで おばあさん、孫、大、猫、ねずみを次々

材だそうです。

です。 ウッ」(タイ語で「うんとこしょ、どっこ もたちは「ワァー」と手をたたいて大喜び きなかぶがパッと飛び出しました。子ど たっ!」。エプロンの胸ボケットから、大 かぶを引っ張る掛け声です。「抜け 身に付けたエプロンの上で、人形たちが いしょ」)と子どもたちの声。保母さんが

# 手作りのエプロンシアター

力で、 ループが手分けをして一か月かけての手 ものです。エプロンはメーカーからの寄 保育支援事業」実行委員会が手作りした このエプロンシアターは、「東南アジア 人形は北区の二つのボランティアグ 二十組が作られました。 広がるかぶの針金加工は業者の協

した。メンバーの一人、北区で保母をして プラテート郡十六の保育所に届けられま ンバー五人がDECを訪れて、 完成品は、昨年十一月、実行委員会のメ アランヤ

佐々木

舞

## Apron Theater Goes To Thai Village

Mai SASAKI Program Coordinator (Thai Project)



"Support Activities for Child Care in SE Asia" are being carried out jointly by International and Cultural Affairs Section of City of Kita (Tokyo), local volunteers and CYR. The activities started April, 1996 included the training given to DEC (CYR in Thailand) Thai staff at nursery schools (trainees: Poot in 1996, Prisana in 1997) and gifts of used picture books with translations and a used car for mobile library. One of the activities for 1997 is discussed.



「孫や、かぶを抜くのを手伝っておくれ」ポケットから取り出した人形を、マジックテープでエプロンにとめます。 "Grandchild, help me pull out the turnip." The doll is taken out of the pocket and attached to the apron by face-to-face fastener.

Do you know a folk tale called "The Turnip"? There was a big turnip in an old man's field which he couldn't pull out. His wife was called, his grandchild was called, a dog, a cat and even a rat were called in to help and finally they pulled the turnip out. This Russian tale is known all over the world.

The story is presented using an apron and dolls. As shown in the photo, an apron is spread and used as a stage....that is why it is called the Apron Theater. Out of the pocket come a big turnip which spreads into a big one, and six dolls. Although I do not recollect seeing it as a child, I am told that this is a regular game in Japanese kindergartens and nursery schools and children love it.

In January, this year I visited Muangphai Child Care Center which is supported by DEC in Aranyaprathet District, and saw the Apron Theater being presented. Children would cheer and say "Ah-Oop" to help dolls pull the turnip out of the apron worn by a child minder. "Here, it goes!", and a big turnip jumps out of the apron pocket. Children cheer in gleeful laughter.

#### Hand-made Apron Theater

Apron Theater was hand-made by the executive committee of the Child Care Support Activities. The aprons were donated by manufacturers, 20 sets of dolls were made by two volunteer groups in a month, and the wire work for spreading the turnip by a processing plant.

Five executive committee members visited DEC in November last year and delivered the sets to 16 child care centers in Aranyaprathet. Ms. Yoko TABEI, a committee member and nursery school teacher in Kita City, taught how to manipulate the dolls at the monthly

training seminar for child minders of the District. Since they already knew the story, it took them only a little while to master the technique. The committee gave the text books in Thai and produced a video showing Kita City's teachers showing how to manipulate the dolls for the benefit of child minders who want to practice on their own.

#### Treasure in the Child Care Center!?

Several days after the training, a child minder at Muangphai Center challenged presentation of the apron theater. Regrettably, children did not know what she was trying to do. Two or three-year olds must have failed to understand the concept of an apron being a stage. Being unused, the child minder could not present it as well as she could have.

るよう、 が実演している説明ビデオも制作し、 いるので、 をしました。保母たちは話の筋を知って まる月例研修会で、使い方の実演と指導 んたちが後からでも自分たちで練習でき んでした。実行委員会では、タイの保母さ いる田部井陽子さんが、 参しました。 タイ語訳の説明書や北区の保母 覚えるのに時間はかかりませ 郡内の保母が 持

保育所の宝物?

います。 まく演じられなかったこともあったと思 たのでしょう。保母も慣れていなくて、 なっているという設定が理解できなかっ 顔で口を開けて見ているだけ。 技もむなしく、 ターに挑戦しました。ところが 一、三歳の子どもには、エプロンが舞台に 研修会の数日後、 「何をしてるんだろう、 さっそく保母さんがエプロンシア 子どもたちはぼかんとし ムアン 先生 イ保育所で 先生の演 という

言うとその時点では、 保育所の宝物としてセロファンの袋に かったとは言い切れません。 入ったまま飾られてしまうの もたちを楽しませることができるのか? シアターは、村の保育所で、果たして子ど タイの村ではエプロンを使う習慣は エブ きれ ロンにはあまり親しみはな いな人形の揃ったエプロ 一抹の不安がな か。 正直に

まだ読めませんが、数少ない絵本の中 んのまねをしてお話を演じていたのです おきなかぶごっこ」をしていました。字は 遊びの時間にも、三、四人が集まって「お しょ、どっこいしょ」と子どもたちは ら「おおきなかぶ」を出してきて、保母さ の世界に入って楽しんでいました。 不要だったと分かりました。 たときには、冒頭でお話ししたとおり その不安も、 二か月後の今年一月に訪 「うんとこ 自由

# イの民話で文化交流を

さんは使い方の説明を受け、 がうかがわれました。 切にしており、 れました。 いる人たちの間では情報交換が行なわ ーについて、 月 の保育研修会では、 贈られたエプロンシアター 教材の不足している村の 活用しようとしているの 前回来られなかった保母 エプロ すでに使っ を大 保母

》卷....

れたらと思っています。 そして近い将来、 ンヤプラテート双方の保育所で、 てエプロンシアターを作り、 価値観の理解が深まればよいと思います タイと日本でこの事業にかかわっている です。保育という共通の事業をとおして 人たちの距離が縮まり、 八年度の「東南アジア保育支援事業 が、 DECで教材製作を担当している 北区での研修に参加する予定 タイの民話を題材に お互いの文化や 北区とアラ

in a picture book"

"You cannot actually touch things

「絵本では触れない」

\*\*

Twice a week, Pinket ยินดัต่อน Khomthaa, a child minder at アターで 「おおきなかぶ」 のお Nongyaplong Village, 話をするという、ノンヤプロ presents the story of "The ン村の保母、ピンケー・コム

Turnip". She says, "In the beginning, it was something strange that they had never seen before, and quite surprising. Children did not show much interests. But as I repeated the story two or three times, children came to enjoy it. They would cheer up when

北区桜田保育園で(撮影 小田原淑子) At Sakurada Nursery School, Kita City (Photo; Yoshiko ODAWARA)

the characters try to pull out the turnip, act like pulling it, and fall laughing all over. When the story is over, they come running to me and try to touch the characters and the turnip. They couldn't handle them in a picture book."

週に二回くらいエプロンシ ターさんの話です。

「最初は見たこともない不思 議なものだったから、きっと、 驚いてしまったのでしょう。 子どもたちはあまり興味を示 しませんでした。でも、二回、 三回と繰り返すうちに、子ど もたちは楽しみにするように なりました。かぶを抜くとき

に一緒に掛け声を合わせたり、引き抜く動作をしたりして、 みな大笑いです。そして、お話が終わると駆け寄ってきて、 本でしか見たことのない登場人物やかぶを触ります。絵本 では触れませんものね。」

In Thai villages, nobody uses aprons and children did not know what it was for. There was indeed a hint of apprehension that the apron theater with pretty dolls might remain a treasure in cellophane wrap on the shelf at the child care center.

However, there was no need for apprehension. When I visited the center in January this year, two months after the previous visit, I knew it was a success. Children were immersed in the world of the folk tale encouraging characters to pull out the big turnip. During the free play session, a few children were seen playing the story of the big turnip. Although they could not read yet, they knew which was the book of turnip, took it out and were playing the story just like the child minders would do.

#### Cultural Exchange Based on Thai Folk Tale

In the training session in February, the child minders who did not attend the previous session were taught how to use Apron Theater and they exchanged information. Those at the villages with scanty play materials were trying hard to utilize the toy maximally.

For 1998 Support Activities, Lek who is in charge of producing teaching materials at DEC will receive training in Kita City. Through their common interests in child care, the distance between people engaged in child care in Japan and Thailand will diminish and hopefully deepen their understanding of each other's culture and senses of value. I do hope that we can produce Apron Theater based on a folk tale of Thailand and present it to children both at Kita City and Aranyaprathet.



人形作りは北区の「こだまの会」と「5 つのふうせんの会」が担当。 (撮影 小田原淑子)

Dolls were made by "Kodamanokai" and "Itsutsunofusennokai". (Photo; Yoshiko ODAWARA)



「何をしているんだろう、先生」(ムアンパイ保育所) \*Whatever is she doing?\* (Muangphai Child Care Center)



エプロンシアターを実演する田部井さん(クドヒン村) Ms. Tabei giving Apron Theater performance (Kud Hin Village)

### カンボジアの幼い 子どものために

(CYK : Caring for Young Khmer CYR のカンボジア事業実施部門)

たのですが、運を天に任せて森の中へ逃 内戦の歴史でもあります。 家の子どもとして生まれました。これま 酷に殺されました。私自身も殺されかけ 人の兄弟姉妹は、強制労働のポル・ポト時 に苦しみを与え続けてきたカンボジアの 経験ばかりでした。それは、すべての国民 での人生はずっと、 森の中でナイフと棍棒によって残 生きるための厳しい 私の両親と六

ンプにあったCYR保育センターで働き ジアに戻りました。私がカオイダンキャ 子を二人もうけました。しかし事情が 九八四年にはタイ国境にある難民キャン ブに逃げ出しました。そこで結婚し、男の それから国内を転々としましたが、 妻は子ども一人を連れてカンボ です。



Author with his sons

## カンボジアに生まれて

げ込んだのです。 私は一九六二年、 バッタンバン州で農

学ぶようになりました。そして、一九九二 います。今はこれまでの人生で一番幸福 した。現在は再婚し、家族五人で暮らして YK) で働くためにカンボジアに帰りま 年、CYRがブノンペンに開いた支部 それから、 私は子どもの発達について

# 援助を必要としている子どもたち

保母たちと協力して、子どものための活 私たちCYK職員は、各地の保育所で

末から一年八か月間働きました。 始めたのはそんな時でした。一九九十年

# 泣いてばかりいたブンナー

ていませんでした。 だCYRの目的、理念についてよく理解 い子どもたちについて、 していませんでした。キャンプにいる幼 保育センターで働き始めた当初は、 何の考えももっ ま

子どもの教育について初めて興味をもち なるのと同時に、何らかの問題を抱えた わるのを目にしたことがなく、うれ は、これまでこんなに子どもの様子が変 元気を取り戻し、友達もできました。私 保育センターに入れました。プンナーは ナーは、母親を恋しがって泣いてばかり おり、私はどうしたらいいのか分からず、 ちょうどその頃、残された息子ブン

保母たちが家庭訪問をすることもありま 保母と話し合う時間をとってくれます 保母たちは、子どもが遊びながら学ぶこ たちはたいへん楽しく過ごしています 動をしています。プノンペン近郊のCV たちが保育所に興味をもつようになり に合わせた行動はしていません。また、親 とをよく理解し、決して自分たちの都 Kが支援する四つの保育所では、

お伝えしなければなりません。 どもたちが援助を必要としていることを 困窮のために、まだ各地で何万人もの子 の不足について話していました。政府の が大部分でした。保母たちは教材と知識 いものがないので、通って来ない子ども があるだけでした。保育時間も短く、面白 が一つと、椅子の代わりに長い丸太三本 教材もありません。私が教育省の職員と 一緒に見学に行ったコンボン・チナン州 保育所では、建物はなく、木の下に黒板 しかし、地方では保育所の数は少なく

思いやりの心をもつ大人になることを堅 く信じています。 尽くしたいと思います。 心して楽しい時を過ごせるよう、 ジアのより多くの幼い子どもたちが、安 親友同士として手を取り合って、 通じて支援してくださる日本の皆さまと 私はこれからもずっと、さまざまな団 政府機関と協力し、何よりもCYRを 子どもたちが大きくなった時に、 CYKの活動が

#### Working For Small Children In Cambodia



PRUM Bunthoeun

Child Care Program Coordinator, CYK (Caring for Young Khmerl CYR in Cambodia)

ゲーム遊び (ブレイタトウ保育所) ©小林正典 Playing game (Prey Ta Toch Child Care Center) © Masanori KOBAYASHI

#### Born in Cambodia

I was born in 1962 to a farmer in Battambang. All my life, I have been fighting for life. My life is the history of the civil war in Cambodia which caused nothing but suffering to every person in the country. My parents and six brothers and sisters were brutally killed by knives and clubs in the forest during the notorious Pol Pot Regime. I myself was almost killed, but I fled into the woods leaving my fate in Providence.

I went to many places in the country. In 1984, I fled to a refugee camp at the Thai border. I got married and had two children, but my wife left me and went back to Cambodia taking one child with her. That was the time when I started working for CYR Preschool Center in Khao I Dang Camp. I worked there for a year and eight months from the end of 1990.

#### Bunna, the Cry Baby

When I started working for the Preschool Center, I only had vague ideas about CYR's objectives and ideologies. I did not think much about small children in the camp.

My boy Bunna, kept crying, asking for his mother, and since I did not know what to do with him, I put him in the Preschool Center. Bunna regained his normal self and made new friends. Up to that time, I had never observed how a child could change overnight. I was so happy for him, and for the first time I began taking interests in education of children with problems.

I also studied the development of children. In 1992, I returned to Cambodia to work at the CYR's branch (CYK) in Phnom Penh. I have since then remarried and have a family of five now. This is the happiest time of my life.

#### Children Who Need Aid

CYK staff work together with child minders of child care centers in various areas to support their activities. At the four centers supported by CYK near Phnom Penh, children enjoy themselves tremendously. Child minders understand very well that children learn through play, and they do not try to adapt children to suit their conveniences. Parents are beginning to show interests in the centers and take time to talk with child minders.

The minders sometimes visit children's homes.

In rural areas, there are only a few number of child care centers and very few toys. I once visited a child care center in Kompong Chnang Province with a staff worker of the Ministry of Education, Youth and Sports. There was no building, just a blackboard under a tree and three long logs to serve as benches. The time was short and activities were not interesting, so children did not come. Child minders told me how limited their material and mental resources were. I must tell you people in Japan that tens of thousands of children still need your help and support badly in many places in my country, especially since our government is so poor.

Above anything else, I would like to continue doing my best for the care of Cambodia's small children by becoming friends with all of you in Japan through CYR and cooperating with various groups and government organizations. I firmly believe that when these children are grown up, they will become adults who care about other people, thanks to CYK's successful activities.

#### 響き合う心といのち

「幼い難民を考える会」が活動を始めて18年。 タイの難民キャンプ、タイやカンボジアの村々の子どもたち、 そして日本に定住したベトナム、ラオス、カンボジアの人たちとともに歩んできました。 それぞれの現場で、子どもたち自身がもつ「育つ力」に励まされながら 様々なかたちで会の活動に携わってきた人々が、 "いま"をどう生き、何を考えているかをご紹介します。

#### 多文化の国カナダに定住して

ヴター・バオ

ブター・バオさんと妻のサコンさん Mr. Vutha BAO and his wife Sakorn

カナダでの新しい生活

私とカンボジア人の九家族がバンクー

政府の支援によってカナダに来たので、 れて、心からうれしかったです。私たちは れてくれました。あいさつされ、親切にさ 府もカナダ人も、私たちを暖かく迎え入 験した冷たい空気の感覚です。 ろでした。よく覚えているのは、初めて経 ーの空港に到着したのは、夕方三時ご カナダ政

通う二人の息子ジャスティン (十歳)とト カナダに来て二人は結婚。現在、小学校に じ年にアメリカに渡ったが、二年後には に一人でカナダに定住。サコンさんは同 ンさんとはキャンプで出会った。 の保育センターで働いた。妻のサコン・サ プに避難し、八一年から約三年間、CYR カンボジアからタイのカオイダンキャン ヴター・バオさん (3歳) は、一九七九年、 (八歳) がいる。 八四年

とでした。 とができ、仕事がなかったり、失業した場 のどこででも生計を立てるために働くこ も、すばらしいと感じたのは、私はカナダ たときには、自分に自信を感じました。で りました。やっと仕事を得ることができ 合でも、失業保険を受ける権利があるこ

難民キャンブでの意味ある経験

思い出しながら、 のは幸運でした。 役立てました。キャンプで学んだことを ブの保育センターで働く機会を得られた ナダに来て、 できました。若く経験のない私が、キャン CYRの保育センターでの経験は、 自分の子どもを育てる時に 子どもに接することが カ

がて、責任をもって課せられた仕事をし、 でいたことではなく、 経験をしたことです。 自信をもって子どもたちと接するという 仕事に自信がありませんでしたが、 私にとって意味があったのは、 最初は年上の人に囲まれての初めて 経済状態の悪い難民キャンプに住ん 保育センターで働 衛生、 栄 es

的な援助を受けました。 仕事を得るまで一年間は、 政府から経済

ため、仕事を見つけるまでに、一年半かか 私は十分な職業経験と技術がなかっ

> ます。子どもたちは即座に英語で答えま す。二人の息子に将来望むことは、大学を れ育ち、英語で教育を受けているからで は難しいことです。彼らはこの国で生ま る市民になることです。 卒業するまで勉強を続け、 てほしいと思うこともありますが、 す。我が子には、母国語クメール語で話し 社会に貢献す それ

もたちには、暴力シーンがなく、子どもに しています。 適切な番組だけを見せるよう、 性があるからです。親の義務として、子ど るうなど、恐ろしい影響をもたらす可 精神状態に悪影響を与え、後々、暴力を振 レビの暴力シーンです。それは、子ども 今、子どもの環境で気がかりなのは、 特に注 テ

クメールの文化と伝統を

会が、 と思います。 す。また、最近、多くの難民が永住者とし 専門知識などを携えて移住してきていま て認められました。このような多文化社 人々が、自国の文化や言語、 カナダには、 カナダをすばらしい国にしている 世界中からたくさんの 職業的技術、

n, する国に住んでいて、 世代に伝えていくために、 ています。 コミュニティーの行事に積極的に参加し 私自身は、 言論や集会、宗教、 幸せだと感じています。 カナダのように民主的で平和 クメールの文化と伝統を次 自分は恵まれて 出版の自由 カンボジア人 が存在

## 子どもの教育

はクメール語(カンボジア語)で話しかけ 息子たちが学校から帰ってくると、 私

#### Reverberating Heart and Life

It is 18 years since CYR started.

We have been working with children of Refugee Camps in Thailand and Thai and Cambodian villages, and with resettlers in Japan from Viet Nam, Laos, and Cambodia.

We shall see and hear how people who have been involved in CYR activities in various ways live and think "now" as they have been encouraged by the inherent power of growing children.

#### Having Resettled in Canada, the Country of Multi-culture

Vutha BAO

Mr. Vutha BAO (39) fled from Cambodia to Khao I Dang Refugee Camp in Thailand in 1979, and since 1981 worked for about three years at CYR's Preschool Center. He met Sakorn SAN at the Camp, resettled in Canada in 1984, married her two years later when she came to Canada via the United States where she went in 1984. Now they have two sons, Justin (10) and Tony (8), who attend the elementary school.

#### New Life in Canada

It was 3 o'clock in the afternoon when I and nine Cambodian families arrived in Vancouver Airport. I remember well the crisp air which I experienced for the first time. Both the Government and people made me feel so welcome. I felt happy that I was being greeted and treated so nicely. Because we came to Canada under the government's sponsorship, we received financial support from the government for a year before we got a job.

難民キャンプで(1982年) At the Refugee Camp (1982)

Because I did not have adequate professional experiences or skills, it took me a year and half to get a job. When I finally got a job, I felt confident with myself. The wonderful thing was that I could go and work anywhere in Canada and when I had no job or was laid off, I was entitled to receive unemployment insurance.

#### Meaningful Experience at Refugee Camp

My experience at CYR's Preschool Center became useful when I started raising children of my own in Canada. I deal with them by remembering what I had learned at the camp. I consider myself quite lucky that an inexperienced young person like me had the opportunity to work at the Preschool Center in the camp.

What was meaningful for me was not the stay at the refugee camp with poor conditions in terms of environment,

health, nutrition and economic conditions, but I had my job at the Preschool Center and gradually responsibility was given to me even though I had no confidence with older people around me. I finally managed to treat children with confidence.

#### Education of My Children When my sons get home from

school, I speak to them in Khmer. They immediately respond in English. Although I sometimes wish that my children would talk to me in my mother tongue Khmer, it is difficult. It is because they were born in this county and receive their education in English. I want my two children to continue studying until they graduate from university and start working so that they will become citizens who would contribute to the society.

I am concerned about violence on TV and their effects on children. They could probably affect their mind adversely, which could lead them to resort to violence. I take special care as a parent to let my children watch suitable programs without any violence.

#### Khmer Culture and Tradition

In Canada, people have come from all over the world bringing their cultures, languages, job skills, expertise and resources. Many refugees have recently been granted permanent residence. This is the reason why Canada with its multicultural society is so unique.

I participate in community activities of Cambodians in order to pass on the Khmer culture and tradition to the next generation. I think I am really blessed and lucky to be able to live in a democratic and peaceful country like Canada where I have the freedom to speech, assembly, worship and press.



#### 地域国際交流ボランティアサークル

#### ×キンクラフ

松本大さんにインタビュ

た。松本さんに事務局の野沢朋子がお話 十万円余りの募金を届けてくださいまし 行っている子どものための活動にと、 口美穂さん、 三年生の松本大(ひろし)さんと後輩の桶 高校生がCYR東京事務局を訪れました。 三月のある土曜日の朝 渡辺泰子さん。 静岡から三人の CYR

を伺いました。

クル」として九六年十月にスタートしま 会が開いている「地球人クリエイトセミ に五人が集まって「CYRを応援するサー 静岡でもこんなことをやってみたいと クリエイトセミナー」に行った人を中心 ナー」に参加し、CYRを訪問しました。 ぼくは二年生の夏休みに、県の教育委員

左から松本さん、渡辺さん、樋口さん

Mr. Matsumoto, Ms. Watanabe, Ms. Higuchi from left to right

講師を招いてアイマスクや車椅子の体験

ホームの訪問もしています。月例会では、 や子どもたちとの交流会を開いたり、老人

耳が聞こえない人のための要約筆記の勉強

会などをしてきました。

## ラブ活動とは違うんですか? 変わった名前のサークルですね。 高校のク

名前にしました。 目が大きく出てますよね。そんなふうに広 に世の中を見てみようということからこの い視野をもって、 名前の意味は、 一つのことにとらわれず デメキンという金魚は

した。 生もいます。会員は六十人くらいです。こ 入会してくれたんです。すごく感動して 小学生が、自分もボランティアをしたいと の前、すごくうれしかったんですけど、地 内に四つの支部があって、社会人や小中学 これだけでもやってきてよかったと思いま 元の新聞で「デメキン」を知った車椅子の 「デメキン」は高校のクラブではなく、

さんの活動を聞かせてください 募金を本当にありがとうございます。

みな

# 募金活動はどんな形で行なったんですか?

三島、浜松の駅前で七回やりました。高校 街頭募金です。これまでに富士や沼津

をつくりたいと思っています。

した。

ので。 パーカーを着て立ちました。 うにしました。その方が受けがいいような 加者に配ったり、あと、必ず制服を着るよ 通行人に質問された時のためのQ&Aを参 も取りました。何回かやっていくうちに てもらって、ちゃんと警察の道路使用許可 ボランティアセンターの人にいろいろ教え 生だと信用されないこともあったんです 寒い時には目立つようにおそろい

した。 いくことでそれが「デメキン」の実績にな ありました。でも、ほくの好きな言葉は、 人数でやっていけるのかと不安がたくさん できる、できる、必ずできる」なんですけ 最初は、本当にやっていいのか、こんな 次への成長の源と考え、活動してきま 最初は自信がなかった活動も、

# 松本さんはこの春卒業ですね。

います。ぼくの方でも、できたら関西支部 ランティアがそのままメンバーになり、 長は渡辺泰子さんです。「デメキンクラブ」 ともっとたくさんの人にCYR、 こまで大きくなったんだと思います。もっ 意識を強めてきました。そこに参加したボ る活気に満ちた活動を展開してほしいと思 「デメキン」のことを知ってもらい、魅力あ 四月から京都の大学に行きます。次の会 楽しみながら福祉のことを学び、 自分たちで自由にいろんな企画を立 そして

すけど、本部は富士市にあります。最初は

名前は「デメキンクラブ」っていうんで

募金活動を中心に考えていましたが、も

と身近なこともやってみようと、外国の人



#### Demekin Club,



#### A Volunteer Group for Global Exchange

#### —Interview with Hiroshi MATSUMOTO—



One Saturday morning in March, three high school students from Shizuoka visited CYR Office in Tokyo. They were Hiroshi MATSUMOTO (a senior student) and his juniors, Miho HIGUCHI and Yasuko WATANABE. They came all the way to deliver the donation of more than 200,000 yen they collected for the use by CYR for children. Following is conversation between them and Tomoko NOZAWA, a CYR staff.

Thank you so much for the donation. Could you tell me about your activities?

I first learned about CYR when I was in the second grade at my high school. During the summer holiday, I attended Create Global Persons Seminar held by the Prefectural Board of Education and visited CYR office. In October, 1996 five of us who attended the seminar got together and decided to start a club to support CYR in Shizuoka.

We named the club Demekin Club and its headquarter is in Fuji City. At the beginning, we concentrated on collecting donations, but gradually we started community activities by organizing exchange meetings with foreign people and children and visiting old people's homes. For our monthly meeting, we organized an event where we had opportunities of experiencing difficulties of being a physically handicapped person by wearing eye masks and going about on wheel chair. We also learned to take summary notes on behalf of people with hearing difficulties.

You have a unique name. Are your activities different from extracurricular activities in your school?

The reason we chose the name Demekin (which means pop-eyed gold fish) is because we would like to have eyes with which to see things from a global point of view.

Activities of Demekin Club are not limited to high schools. We have four branches in Shizuoka and about 60 members including workers, middle school students and primary school children. The other day a wonderful thing happened; a primary school pupil who must use wheel chair to go to places read about our club in a local newspaper and joined us. I was so impressed and felt that our efforts had been rewarded.

#### How did you raise your money?

We collected money by asking passersby in front of stations at Fuji, Numazu, Mishima and Hamamatsu. We did this seven times so far. With the advice from the Volunteer Center, we obtained an official permit from the local police station for activities on the street so that people will trust us even if we are high school students. As we did this for a number of times, we distributed question & answer sheets just in case some interested people asked us about our activities and we always wore our school uniforms. That seemed to give better impressions. During the cold weather, we would put on conspicuous parka jackets in order to attract attention of passers-by.

In the beginning, I was anxious if we were doing the right thing and if the number of members was enough to run the club. There is my favorite phrase "I can do it. I can do it. Sure, I can do it." As we continued our activities about which we were not so confident, we thought that by continuing something, we achieved something for Demekin Club and this would lead to further progress.

You are going to graduate from high school this April, are you not?

Yes. I will attend a university in Kyoto in April. Yasuko WATANABE will take the position of the next president. Demekin Club made various plans freely on our own, learned about welfare with fun while strengthening the bond among members. I think our club became bigger because casual volunteers who participated in an event stayed on and became members. I hope more people will get to know about CYR and about Demekin Club and extend these interesting and vigorous activities further ahead. If possible, I will try to establish a branch in Kyoto.

開かれまし





#### Hanamatsuri Concert"

"Hanamatsuri Concert; TAKEHISA Genzo and Spring Banquet" was held on April 8 at Hyakkannon Meijidera Buddhist Temple in Nakano-ku, Tokyo under the joint sponsorship of Meijidera and CYR and with assistance from the chief priest, Rev. Eio KUSANO, Mr. Genzo TAKEHISA, harpsichordist, and Ms. Erika MAEDA and Mr. Hiroaki TAKAHASHI, CYR members. The concert was to benefit children in Thailand and Cambodia. It was the fourth concert.

More than 150 people attended the concert, sat on the floor and chairs in the main hall of the temple, and listened to fortepiano, the old type piano, soprano and violin.

The concert began with fortepiano performance by Mr. Takehisa interspersed with his talks. Rev. Fukamizu, the representative of CYR, told the audience that was a Catholic priest and shook hands with Rev. Kusano as the audience clapped, cheering

It was a rainy cold day, but big cherry trees were lit up in the temple compound to highlight the spring scene.

楽器フォルテピアノと、 との共催で、 とカンボジアの子どものために開かれまし 今年で四回目になります 花まつりコ ンの演奏が行なわれました。 カさん、高橋敬章さんの協力により、 奏者の武久源造さん、CYR会員の前 開催されました。 入場者は百五十人を超え、 たお堂で、 月八日 東京都 住職の草野榮應さんとチェン ピア これは、 中 0 前身といわ 武 区の百観音明 ブラ 久源造 明治寺とCY 座布団と椅 ヴァ れ 春 0 田 宴

が な桜の木々 内では大き 華やぎを 7 ラ 1



面もありました 握手を交わすと、会場から拍手が湧く一 トリック神父であることを話して草野住職 れました。 演奏に始 は武久源造さん R代表理事深水が お話をは のフ さみなが ル 自身

当日は、

が降る肌寒い天気でしたが

CYRの活動をご支援ください Please Join CYR

年会費 Membership Fee per year

¥10,000 学生会員 Student member 正会員 Regular member

贊助会員(団体)Supporting member (Organization/Corporation) ¥30,000

贊助会員(個人)Supporting member (Individual) 規定なし

Any amount

¥3,000

下記の口座に「入会」とご明記の上ご送金ください。

Please send the money to the following account;

郵便振替 口座番号 00110-8-36227

Postal Transfer: PO Acct. No.00110-8-36227

銀行振込 第一勧業銀行広尾支店 普通 1280817

Bank Transfer: Daiichikangyo Bank Hiroo Branch Savings Acct. No. 1280817

幼い難民を考える会は、難民になったカンボジアの子どもたちがけんめい に生きようとする姿に触発され、1980年に組織されました。1992年までタ イの難民キャンプで保育センターを運営してきました。現在はタイとカンボジ アの農村で、子どもたちが健やかに育つことのできる場所づくりをめざして、 主に村の保育所を中心に、子どもと女性を対象とした活動を続けています。

子どもたちの明日

Children, Our Future

CYR News No.46

発行日 ■ Published

1998年6月5日 June 5, 1998

発行人 ■ Publisher

深水正勝 Masakatsu Fukamizu

編集責任者 ■ Editorial Director

関口晴美 Harumi Sekiguchi

翻訳 m Translation

大井幸子 Sachiko Ohi

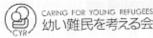
印刷 ■ Printing

三興印刷 Sanko Printing Co., Ltd.

発送 ■ Circulation

CYRボランティア CYR Volunteers

定価 200 円 (会員は会費に含む) ¥200 (included in membership fee)



東京事務局 〒 160-0012 東京都新宿区南元町 6-2 ☎ 03-3353-9947 FAX 03-3353-9739

Head Office :6-2, Minamimotomachi, Shinjuku-ku, Tokyo 160-0012, Japan :Red Rose Court #C-1, 110/6 Pradipat Rd., Bangkok 10400, Bangkok

Thailand 2 279-8837

Phnom Penh: No.98 St.432 Sangkat Toul Tumpoung II, Khan Chamkar Mon, Phnom Penh, Cambodia 23-720849